

## 喜界島におけるジオパーク認定に向けた取組 — 離島における地域資源活用と課題解決の視点から —

鈴木倫太郎（喜界島ジオパーク推進協議会/喜界島サンゴ礁科学研究所）

rintaro@kikaireefs.org

キーワード：離島・課題解決・地域資源の活用

### はじめに

喜界島は、奄美大島の東約 20 km に位置し、周囲 48.6 km、面積 56.9 km<sup>2</sup>、最高標高が 214m の島である(図 1)。人口は約 6,500 人、基幹産業は農業で主にサトウキビを栽培しているほか、白ゴマの生産量は国内生産量の 6 割を占める。喜界島は、隆起運動の活発な島として知られ、東から移動してきたフィリピン海プレートがユーラシアプレートに沈み込む琉球海溝に近く、海底に奄美海台の高まりがあることにより、10 万年で約 200m の隆起速度を示す。島の基盤は島尻層群から成り、その上に形成されたサンゴ礁が隆起し、年代ごとの隆起サンゴ礁段丘を形成している(写真 1)。島の周囲の海岸は完新世以降に隆起したサンゴ礁段丘が取り巻き、砂浜はほぼ無い。さらに海岸に接する海域では現成のサンゴ礁が発達し、そのなかには 445 年

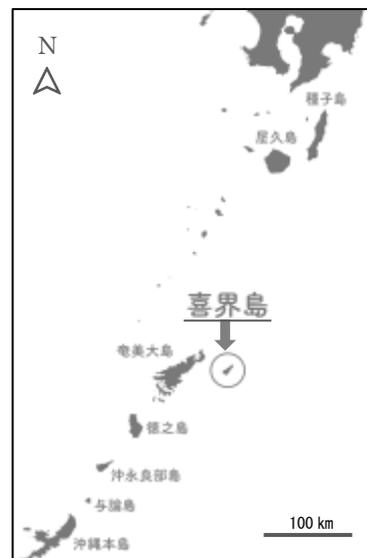


図 1. 喜界島位置図

生き続ける塊状ハマサンゴ(写真 2)や、世界で最北のアオサンゴの群生が見られる。また、島ではサンゴ礁の生態系サービスや海岸地形の影響を受けた独自のサンゴ礁文化が見られる。



写真 1. 喜界島の隆起サンゴ礁段丘



写真 2. 445 年生きる塊状ハマサンゴ

### 喜界島の現状と課題

喜界町第六次総合振興計画(2022)によると、喜界町の人口は、昭和 40 年代の人口減少が著しく、その後も減少傾向を示しており過疎・少子化・高齢化等の問題が顕在化している。また、町民一人当たり所得は 県民一人当たり所得の 85.3%、国民一人当たり所得の 66.6% となっており依然として格差は大きく、産業構造・社会情勢の急速な変化に対応した地域振興策の必要性が指摘されている。また、地域特性を生かした観光地づくりを進め、観光施設の整備や地域住民とふれあう体験型観光等を推進している。しかし、観光客・交流人口を増加させるためには、限られた航空機と船舶による通手段の根本的な解決が必要であり、早期の改善は困難であることに加え、往來にかかる交通費の高さや、集客における情報発信不足等が、解決すべき問題として挙げられる。

喜界町は、これらの問題について本町が過疎からの脱却を図り、町の将来像とする「子や孫の世代が住んでよかったと思える元気な島」を目指し、13の課題(表1)の解決を総合計画の実施目標に掲げた。

### ジオパーク認定に向けた検討

喜界町は、その世界的にも珍しい島の成り立ちから多くの研究が成され、特に地質地形関連の分野では学術的価値が高い島として認識されていた。しかし喜界町は、島の希少性や学術的価値の高さについて認識はしていたが、その価値を活用しきれない状況にあった。2014年、喜界島に「喜界島サンゴ礁科学研究所」が開設し、多くの研究者と学生が訪れる拠点施設が誕生した。これを機会に、喜界町と研究所が連携し、地元小学校への教育活動などの展開が始まると共に、町内では喜界島をジオパークに認定する機運が高まった。その後、2018年に喜界島ジオパーク基本構想検討委員会を設立し、ジオパークの認定に向けた検討が開始され、2019年に喜界島ジオパーク基本構想を策定。2022年に喜界町役場内で申請に向けたプロジェクトチームが立ち上がり、2023年6月に喜界島ジオパーク推進協議会が発足した。10月には喜界島ジオパーク(構想)のロゴマークが公募により選定された(図2)。

### 喜界島が目指すジオパーク

喜界町がジオパークの認定を目指すにあたり、役場内のプロジェクトチームは結成当初、喜界町がジオパークを目指す意義についてワークショップや議論を重ねた。様々な意見が挙げられたが、まず、世界的にも稀な自然資源が島民に認識されていない、またその自然資源を活用できていない現状にあることを認識した。プロジェクトチームでは、これらをどのように解決するかを検討していく過程で、ジオパークの枠で想定する取組を町の課題と紐づけることによって、その課題を解決できるツールになり得ることに着眼した。このことから、喜界町ではジオパークによる取組が、町が定める計画の実現、課題解決の手段としての活用することを、喜界町におけるジオパーク推進における基本方針と定めた。ただし、その取り組みは効率的かつ効果的である必要性に基づくこととした。例として、ジオパーク推進による観光推進については、喜界島は小型の飛行機と船でしか交通手段がなく、宿泊施設数が限られている。また、東京や大阪などの大都市圏からの交通アクセスが悪いなどの事情から、過度な観光入域者数の増加は見込めず、観光促進についてはジオパーク推進の主目的とせず、あくまでも現在の観光向けコンテンツの充実を目標とした。また、資金的にジオパーク推進にかかる予算も少ないことから、既存の取組をジオパークの取組と関連付けた活動の推進を展開している。そして現在、推進協議会ではジオパークの活動について、その一つ一つを町の計画の取組内容と関連付けた到達点目標を設定し、役場内の関連する課が横断的に協力し、推進活動に取組んでいる。このように、喜界島ジオパーク(構想)では、ジオパークによる取組を、町が掲げる課題を解決し、町の将来像の実現する一助となることを目的として、2024年度日本ジオパークの認定を目指している。

### 表1. 喜界町第6次総合計画における課題

- (1) 子育て環境の確保
- (2) 高齢者等の保健及び福祉の向上及び増進
- (3) 医療の確保地域における情報化の推進
- (4) 防災対策・体制の強化
- (5) 生活環境の整備
- (6) 交通施設の整備、交通手段
- (7) 環境に配慮した循環型社会の創出
- (8) 産業の振興
- (9) 移住・定住の促進
- (10) 観光の推進
- (11) 教育の振興
- (12) 地域文化の振興
- (13) 町民と行政の協働



図2.喜界島ジオパーク(構想)ロゴマーク